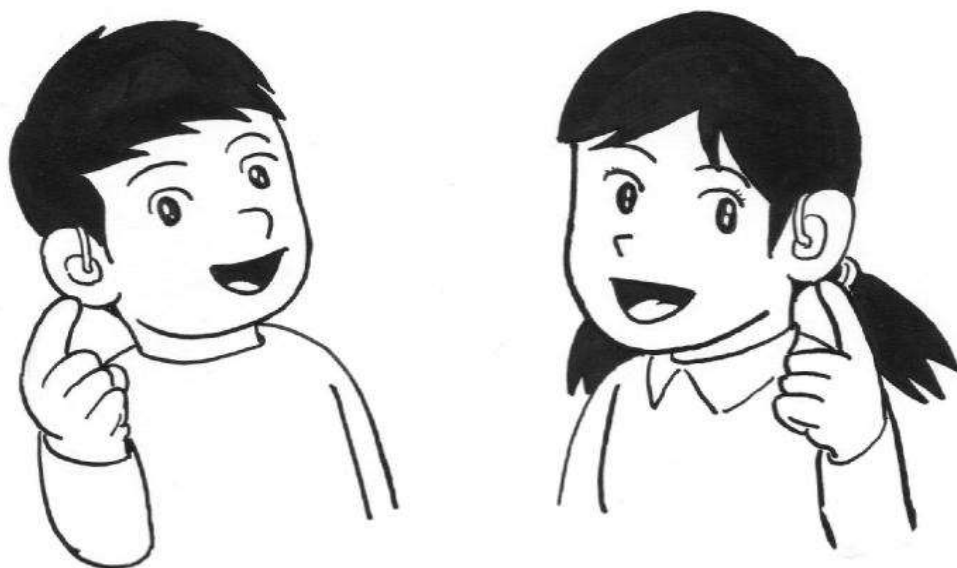


難聴をもっと知るために

～難聴の子どもにかかわる先生方へ～



目 次

(1) 聞こえの仕組みと補聴器について

○ 聞こえの仕組み	2
○ 聴力と聞こえ	3
○ 難聴の聞こえ方	4
○ 難聴が及ぼす影響	5
○ 難聴の発見と教育	6
○ 補聴器の装用	7
○ FM補聴器・デジタル補聴援助システムについて	8
○ 補聴器の管理	9

(2) 学級経営上の配慮について

○ 聞き取りやすい教室に	12
○ 子どもと話すときこんなことに気をつけて	13
○ こんな話し方に注意して	14
○ こんなことが苦手	15
○ あたたかい雰囲気のある教室を	16
○ 学校生活ではこんなことに配慮を	17
○ 友達づくりの手助けを	18

(3) 学習指導上の配慮について

○ 教えるときこんな工夫を	20
○ 学習中、こんなことに気をつけて	21
○ 語彙の拡充を	22
○ 教科書や補助教材の使い方	23
○ 学力をつけていくために	24
○ 苦手な文について	25
○ 国語ではこんなところに気をつけて	26
○ 国語の展開例	27
○ 算数ではこんなところに気をつけて	28
○ 社会や理科ではこんなところに気をつけて	29
○ 体育ではこんなところに気をつけて	30
○ 音楽ではこんなところに気をつけて	31
○ 家庭でも学習の手助けが必要	32
○ 子どもたちを見守って	33

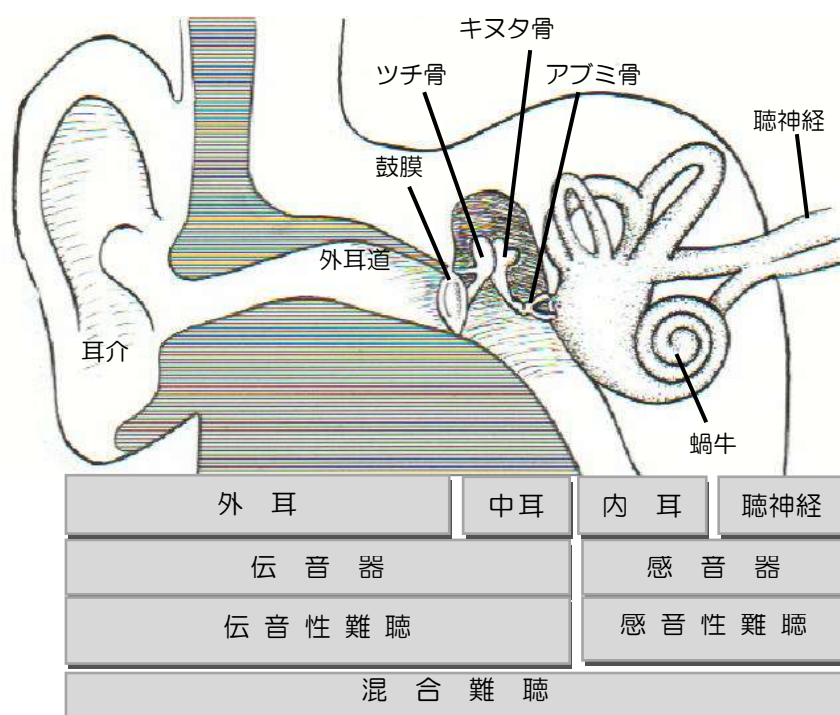
(4) その他

○ 当事者のこえ	34
○ おわりに・用語解説	35
○ 福祉法	37
○ 参考資料	38
○ あとがき	39

聞こえの仕組みと 補聴器について



聞こえの仕組み



- ^{じかい}耳介—集音する。
- 外耳道—音を鼓膜へ導く。
- 鼓膜—楕円形の薄い膜で、音を受けて振動する。
- 耳小骨—ツチ骨、キヌタ骨、アブミ骨からなる小さな骨で、鼓膜の振動を蝸牛に伝える。
- ^{かぎゅう}蝸牛—内部はリンパ液で満たされていて、音の振動を有毛細胞で電気信号に変えている。
- 聴神経—電気信号を脳に伝える。

●音の伝わり方

空気を伝わってきた音は、^{じかい}耳介→^{がいじどう}外耳道→^{こまぐ}鼓膜→^{じしやうこつ}耳小骨→^{かぎゅう}蝸牛→^{ちやうしんけい}聴神経→脳と伝わっていきます。この経路のどこかに伝わりにくい所があると難聴が起こります。

^{がいじ}外耳から^{ちゆうじ}中耳に損傷がある場合は^{でんおんせいなん}伝音性難聴と呼ばれます。^{ちやう}内耳と^{ちやうしんけい}聴神経に損傷がある場合には^{かんおんなんちやう}感音性難聴と呼ばれます。

伝音性難聴には、^{しんしゆつせいちゆうじえん}滲出性中耳炎、^{まんせいちゆうじえん}慢性中耳炎のほかに、先天性の外耳・中耳の形態異常、^{じこうせんそく}耳垢栓塞、^{じこうかしやう}耳硬化症、^{がいしやうせいじしやうこつれんざりだん}外傷性耳小骨連鎖離断などがあります。伝音性難聴は、最大でも 60dB（デシベル）程度の障がい、高度難聴になることはありません。

感音性難聴には、^{とっぱつせいなんちやう}突発性難聴、メニエール病、ウイルス性難聴のほか、ストレプトマイシン等の薬剤難聴があります。

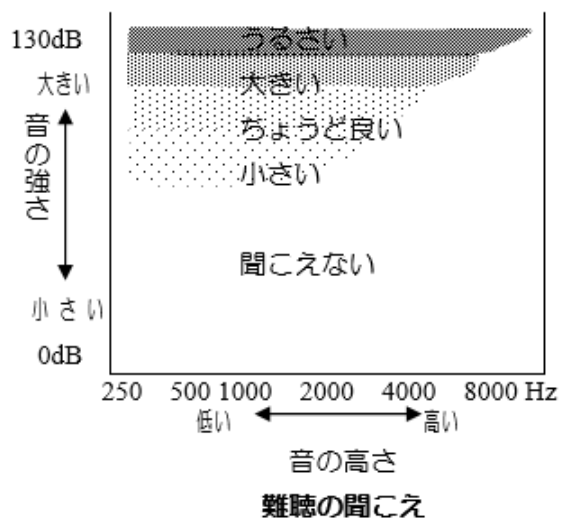
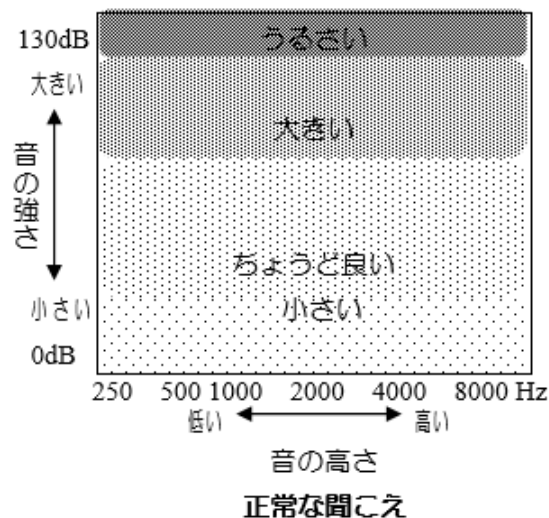
^{こんごうなんちやう}混合難聴は、伝音性難聴と感音性難聴が合わさったものです。熱・薬等が原因といわれますが、原因不明なことが多いのです。

●聞こえの程度はさまざまです

外耳や中耳などに原因のある伝音性難聴は音が小さく聞こえるだけなので、補聴器を掛ければ、私たちと同じように聞こえる可能性が高いです。外科手術や薬物投与などで改善されることもあります。

混合難聴の場合は医療分野での治療は難しいのですが、教育分野や療育分野で聞こえの発達や正しい聞き取り方を促すことができます。難聴は聞こえないのではなく、聞き取りにくい又はそれぞれのきこえ方に違いがあるだけなのです。^{ゆうもうさいぼう}蝸牛の中にある有毛細胞の、どこの部分がどのくらい反応が悪いのかによって聞こえ方が変わってきます。その程度は一人一人違ってきます。それによって聞こえ方も違ってきます。その聞こえ方に合わせて補聴器を掛けています。

難聴の聞こえ方



●音の大きさの感覚も違うのです

難聴の子どもは、私たちの感覚と違って、ある大きさの音までは全く然聞こえません。私たちが「ちょうど良い」とか「大きい」と感じる大きさになってはじめて「小さい音」として聞こえます。そして、音が少しずつ大きくなるにつれて、「ちょうど良い」から「大きい」と感じます。「小さく聞こえた」から「大きい」と感じるまでの幅は狭いのです。でも、「うるさい」と感じる音の大きさは変わりありません。

●聞こえ方は一人一人違います

低い音から高い音まで、どのくらいの大きさで聞こえるのかを調べるために聴力検査をします。その値はそれぞれ違い、聞こえ方もさまざまです。難聴の聞こえ方は、「破れたスピーカーから聞こえる音」とか「プールの中で聞いている音」などと表現されることがあります。何を話しているのかははっきりしない、こもったような聞こえ方なのでしょう。補聴器をかけていても、はっきり聞こえるわけではありません。今まで聞こえなかった小さい音を大きくしたり、言葉を聞き分けられたりする手掛かりを浮き立たせてくれるのです。

●一側性難聴について

片方の耳が高度の難聴である状態を一側性難聴（一側ろう）といいます。もう一方の耳は正常に聞こえるため気づきにくく、就学時健康診断で見つかるケースもあります。片方の耳が聞こえているので、言葉の習得に大きな問題はありません。しかし、難聴がある側から声を掛けられると聞こえない。離れた場所から声を掛けられても、どこから声を掛けられたかわからない。賑やかな場所では、話が聞き取りにくい。何かに集中していると気配に気づきにくい。など配慮が必要な場面はいくつもありますので、聞こえる側から話し掛けたり、聞き取りやすい場所を確保したり、賑やかな場所では聞き取りが難しいため、視覚的な情報と合わせて提示するなど安心して参加できる環境作りが大切です。

※聴力検査は、医師や言語聴覚士が行う医療行為です。聾学校では、「聴力測定」として行い、補聴器を調整するための資料にしたり、校内で聞こえの様子を把握したりするために行うことが認められています。そのため、原則として学校で行った聴力測定の結果は、医師の指示以外ではお渡しできません。

難聴が及ぼす影響

難聴の程度	聞こえとことばへの影響	心理的・社会的影響	教育の必要性
正常と難聴の境界 16～25dB	補聴器がないと、小声の会話や離れたところの会話を聞き取ることが困難である。教師が離れている場合や騒がしい教室では会話の10%を聞き逃してしまう。	ことばがはっきりしないために、場にそぐわないことをするなど、失敗をする子どもと見られやすい。速いことばのやり取りについていけないので、社会適応と自己理解に影響が出始める。聞き取りの努力が必要なので、疲れやすい。	補聴器やFM補聴器が必要。拡声装置が有効な場合もある。座席にも注意が必要。再発性中耳炎の場合、語彙や発音に注意する必要がある。担任教師は言語発達と難聴の学習への影響について研修が必要である。
軽度難聴 26～40dB	聞き取りは、教室の騒音や教師との距離、聴力型に左右されるが、補聴器を付けないと聴力が30dBで25～40%、30～40dBだと50%を聞き逃すことがある。特に声が小さかったり、話し手が見えなかったりする場合に聞き取りができない。	「自分の都合のよいことしか聞かえない」「ぼんやりしている」と注意されることで自信をなくすことがある。環境騒音に影響され聞き取りの能力が落ち始める。聞き取りの努力が必要なので、疲れやすく、学習環境がストレスの多いものとなる。	補聴器やFM補聴器が必要。適切な座席と照明に配慮が必要。聞き取りの能力を高める必要がある。語彙と言語発達、発音、会話を読む力と読解力の指導に注意を払う必要がある。言語力の評価と教育的経過観察のために特殊教育機関との連携が必要。担任教師は言語発達と難聴が学習におよぼす影響について研修が必要である。
中等度難聴 41～55dB	知っている構文と語彙の会話ならば1～1.5mの距離で対面した会話ができる。補聴器をつけなければ40dBで50～70%、50dBで80～100%の会話を聞き逃してしまう。構文や語彙などの言語能力の遅れと発達の未熟さや声質の歪みなどが起こりやすい。	コミュニケーションに影響を受け、交友関係がさらに難しくなる。補聴器をつけていることで、能力が低く見られがちである。自尊心が傷付けられる場合がでてくる。	補聴器やFM補聴器が必要。言語評価と教育的観察のために特殊教育機関との連携が必要である。会話力、読解力、作文力の発達に注意を要する。聞き取りの訓練と教科指導への配慮が必要である。担任教師は言語発達と難聴が学習におよぼす影響について研修が必要である。
準重度難聴 56～70dB	補聴器がないと、大声で会話をしなければならぬ。これ以上の聴力になると会話の100%を聞き逃してしまう。音声での会話が非常に困難となり、意思の伝達の困難さは顕著となる。言語力の遅れ、発音明瞭性の低下、調子の外れた声の出し方が目立つ。	学校生活でも情報が不足するので、学習能力が低いと見られることがある。自己認識の甘さや社会性の未熟さを指摘されるようになり、周囲からの疎外感が生まれる。	常時補聴器が必要であり、専門の教師から言語指導、教科指導読み書きの指導などの援助が必要である。経験に基づいた言語の基礎を拡げるための援助が必要である。担任教師は言語発達と難聴が学習におよぼす影響について研修が必要である。
重度難聴 71～90dB	補聴器がないと30cm離れたところの大声がやっと聞こえる。補聴器が適切に調整されていれば周囲の音が認識でき、会話を聞き取ることができる。言語習得以前に難聴になると音声言語と発声は自然には発達せず、非常に遅れる。	難聴をもつ子ども同士で集まることが多くなる。健聴児との交流が少なくなってしまうがこのような交友関係が自己認識やアイデンティティを養うことにもなる。	常時、補聴器が必要であり、聞き取りと会話を読み取る指導、言語指導と発音指導のプログラムが必要である。ことばを覚える段階では多感覚を活用したアプローチが必要である。コミュニケーションの方法が適切かどうかをチェックする必要があり、有効であれば普通学級の授業に参加できる。担任の聴覚障がい児教育についての研修が欠かせない。
最重度難聴 91dB以上	適切な補聴器を装用すれば、音声の韻律や母音を聞き取ることができる。聞き取りが厳しいとコミュニケーションと学習の手段として、聴覚よりも視覚に頼る。そのままでは音声言語力は発達しない。	聴覚・口話能力、仲間との手話使用、両親の態度などにより次第に難聴の文化にかかわることを好むようになったり、反対に嫌ったりする。	言語指導と教科指導を中心とした聾教育プログラムが必要であり、専門家による指導と総合的な援助が必要である。コミュニケーション手段と学習方法の継続的な評価が必要である。

「補聴器活用ガイド」大沼直紀より作成

難聴の発見と教育

●難聴はどのように発見されることがあります

1歳半健診や3歳児健診で難聴が見つかることがあります。また、保護者や周りの大人が見つけることもあります。最近では生後まもなく新生児聴覚スクリーニング検査で発見されるケースが多くなってきています。

●乳幼児期からの早期教育が大切です

難聴が発見されると、子どもと保護者を対象に早期教育を開始します。難聴があることで聞こえにくいことのほかに、言葉の発達にも遅れが出てくる場合があります。ですから、できるだけ早い時期に補聴器を掛けて聞こえやすくし、さまざまな場面で音や言葉を聞かせ発語を促すことで、自然な言葉の発達を導くことができます。

聾学校には乳幼児相談室があり、0歳からの教育相談を行っています。また、幼稚園、小学部、中学部があり3歳から入学することができますが、子どもや保護者のニーズに応じて定期的に教育相談を受けることもできます。

●保護者も一緒に通ってきます

乳幼児相談室や幼稚園の時期は、保護者も一緒に学校へ通い、指導の様子を見学することでかわり方を学ぶことができます。子どもの言葉を育てるには日常的にかかわることが多い保護者等とのコミュニケーションが大切です。聞こえる子どもは、保護者や周りの大人の話し掛けを聞きながら自然に言葉を覚えていきます。難聴の子どもも言葉を覚える道筋は同様ですが、意図的にコミュニケーションの場を工夫しながら子どもに話し掛け、入力を増やすことが必要になります。子どもの言葉を育てていくときには保護者の働き掛けが大切なのです。補聴器を操作や身の回り

のことを手伝えるためには保護者の手が必要です。このように難聴の乳幼児とかかわる際に、周りの大人がどんなことに気を付けたら良いのかを、学校と家庭とで話し合い、協力しながら育てると教育効果が上がります。

●豊かな経験が言葉を育てます

心と言葉は密接につながっているため、言葉を育てるためには心を育てることが重要になってきます。乳幼児相談室や幼稚園では遊びやさまざまな行事、そのほかのあらゆる経験を通して、心身の調和をはかりながら心と言葉を育てます。

具体的には、見立て遊びやごっこ遊び、身近な生活の経験や行事の話し合い活動などを通して、子どもはコミュニケーションの意欲や態度を身に付けていきます。また、生活に必要な言葉や考え方、行動の仕方なども覚えていきます。



補聴器の装用

●補聴器は周りの音を大きくします

補聴器は、先生や友達の話し声、音楽や校内放送、動物や鳥の鳴き声、車の走行音など、子どもの周りにある音を拾って大きくしてくれます。

実際に補聴器を掛けてみると分かるのですが、今まで気付かなかった音まで大きく聞こえます。子どもはそのさまざまな音の中から話し声を聞き取っているのです。ですから、静かな場所で話を聞く方が聞き取りやすいため、音環境を整えることも大切です。

●補聴器を掛けていても聞き取りにくいのです

補聴器を付けているからといって、子どもは障がいのない人たちのように聞こえているわけではありません。聞き取りにくい音や言葉があります。その子どもによって聞き取りにくい音は違いますが、一般的に子音が聞き取りにくいのです。「さ・す・せ・そ」の「^{エスおん}s音」や「しゃ・しゅ・しょ・し」の「^{ロングエスおん}j音」、
「た・て・と」の「^{ディーおん}t音」、「か・き・く・け・こ」の「^{ケーおん}k音」などが聞こえにくいようです。

「さかな」が「ああな」のように聞こえたり、本人が「げんきです」と話したつもりが相手には「げんちでしゅ」と聞こえたりします。

また、子どもの周りにあるさまざまな音がじゃまをして子どもが必要とする音を聞き取りにくくしている場合があります。えんぴつが転がる音、立ち上がるときにいすを引く音、立ち上がる時に机や椅子が床を引きずる音などは、補聴器を通すと多くの場合耳に響きます。

●補聴器は音を調整しています

聾学校には平均聴力が 100dB を超える子どももいます。その子どもたちの補聴器は、私

たちの感じる小さな音も 100dB 位の大きな音になるよう調節されています。でも、これ以上耐えられないという音の大きさは同じなので、130dB を超えないようにしています。

ですから、急に音が聞こえるとびっくりしたり、何度も名前を呼んでも振り向いてくれなかったりするということがあるのです。

●人工内耳について

人工内耳は、補聴器の装用効果が不十分などの重度難聴等が対象になります。音の伝わり方について（P 2 参照）、補聴器は音がまず鼓膜に達しますが、人工内耳は体外装置のマイクで拾った音などを電気信号に変えて、埋め込んだ電極が聴神経を直接刺激して脳に伝えられて音や声などとして認識されます。本来は機械的に合成された音ですが、かかわる人たちのサポートにより、言葉が聞き取れるようになってきます。

学習面で配慮することは、頭部に体内機器が埋め込まれているため、強い衝撃で破損する可能性もあります。武道やサッカーなど頭部に強い衝撃が加わるスポーツには注意が必要です。また、水泳では体外装置を外すとすると参加可能です。機種によっては、防水ケースを付けて水泳中も装着可能なものもあります。ただし、体外装置を取ると、聞こえない状態になります。事前に学習内容の伝え方やルールなどを話し合っておくと不安も少なく学習に参加できます。また、体外装置の完全防水のカバーなどを装着して泳ぐ場合は、機器が高額なため破損した場合等の取り扱いについて保護者等と十分に話し合ってから使用することをお勧めします。

補聴器や人工内耳をしていても、聞こえている人と同じようには聞こえません。聞き取りやすいときと聞き取りにくいとき、聞き間違えるときがあります。誤解が生じないように配慮してあげることも大切です。

FM補聴器・デジタル補聴援助システムについて

●FM 補聴器で先生の声が直接耳に届きます。

補聴器は周りの音を大きくします。しかし、先生の声や発言している人の声だけを大きくするわけではありません。

先生がワイヤレスマイクをつけて話した声を、FM 電波を使って子どもの補聴器に送ります。これが FM 補聴器です。

先生の胸元にあるマイクを通した音が直接子どもの耳に届くので、周りが多少ざわついていても先生の声が確実に届きます。また、教室中でも距離がちょっと離れると先生の声が聞き取りにくくなりますが、ワイヤレスマイクをつけていれば、多少離れていても声は届きます。

小学校の低学年であれば、先生が教室を移動することも多くなるでしょう。教室のどこにいても先生の声が子どもの補聴器に届けることができるのです。

●FM 補聴器でも聞きもらすことがあります。

FM 補聴器を使っても言葉の一部を聞きもらしたり、はっきりと聞こえなかったりすることがあります。子どもは、自分が聞きもらしたことを自覚できないことが多いのです。話し合いの場面では、経験していないことや知らない言葉が多くなると聞きもらしてしまうかもしれません。また、話を聞くことに集中する時間が長くなると疲れてしまうこともあります。先生の声は聞こえますが、だからといって意味が伝わっているとは限りません。どのように理解したか確認が必要です。

FMマイクを使っていれば先生の声は補

聴器から入ってきます。でも、発言している友達の声が聞こえないケースがあります。そういう場合には、クラス全員で発言を共有するために、先生が子どもの発言を繰り返して言ってあげると効果的です。

●デジタル補聴援助システム

補聴器や人工内耳を装用していても十分な聞き取りができないことがあります。デジタルワイヤレス補聴援助システムは、ワイヤレスマイクで拾った音声をデジタル無線方式で送信し、すぐそばで話しているような大きさを、補聴器や人工内耳へ届けるシステムです。FM 補聴援助システムに比べ、混信がなく、よりクリアな音声を聞くことができます。

タイプの違う機器はありますが、首に掛けて話し手の声が直接届いたり、インタビューのように話し手がマイクのように持ったり、小グループでの話し合い活動では、中央に置いて、話している人の声を拾うなどいろいろな機能があります。

補聴器や人工内耳をして音が聞こえるということだけでなく、様々な音を聞き取って、音とその音のもつ意味を結び付けることにもデジタル補聴援助システムはとても効果的です。

本校では、デジタル補聴援助システム機器を3台常備し、聴覚活用できる体制を整えています。



補聴器の管理

●日常の管理は、子どもと保護者が行います。

補聴器の電池を取り替えたり、耳栓の清掃をしたりなどといった日常的な管理は、子どもと保護者が行います。

学校では、毎朝、先生が実際に聞くなどして、補聴器の状態を確認してください。

○電池が切れかかっている、子どもの反応がいつもより鈍くなっていないか

○イヤモールドが外れかかっている、「ピー」という音が鳴っていないか（ハウリングしていないか。）

などに注意してください。

●補聴器は水に弱いのです。

補聴器の中には、マイクとアンプとスピーカーと電池が入っています。どれも、水に弱い電子機器です。夏場や運動の後など汗をかいて補聴器がぬれたままにならないように声を掛けてあげてください。

汗をかいた後は耳の後ろを拭いたり、プールの後などには綿棒で耳の穴の水分をふき取ったりすることが必要です。プールの時には子どもに綿棒を用意させておくか、保健室の先生にお願いするかなどして、水分を十分ふき取ってください。



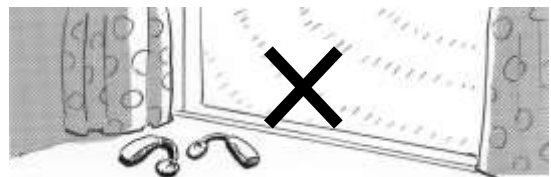
●補聴器が故障したときには、保護者に連絡してください。

補聴器から音が出ていなかったり「ブーン」というような音が聞こえたり、「ピー」という音が止まらなかったりしたときには保護者に連絡してください。

また、試聴用のチューブなどを使って音を聞いてみると、「いつもと聞こえ方が違う」とか「音がきれいに聞こえない」時には故障と考えられます。電池を取り替えてみても状態が変わらないときには、保護者へ連絡してください。

●手入れをしてください。

○直射日光が当たる場所やストーブの前、湿気の多いところには置かないようにしましょう。



○使わない時には、乾燥剤入りのケースに保管しましょう。



○イヤモールドに汚れがあれば、きれいにしましょう。



○チューブの水滴もふき取りましょう。



学級経営上の 配慮について



聞き取りやすい教室に

●座席にも分かりやすい場所があります。

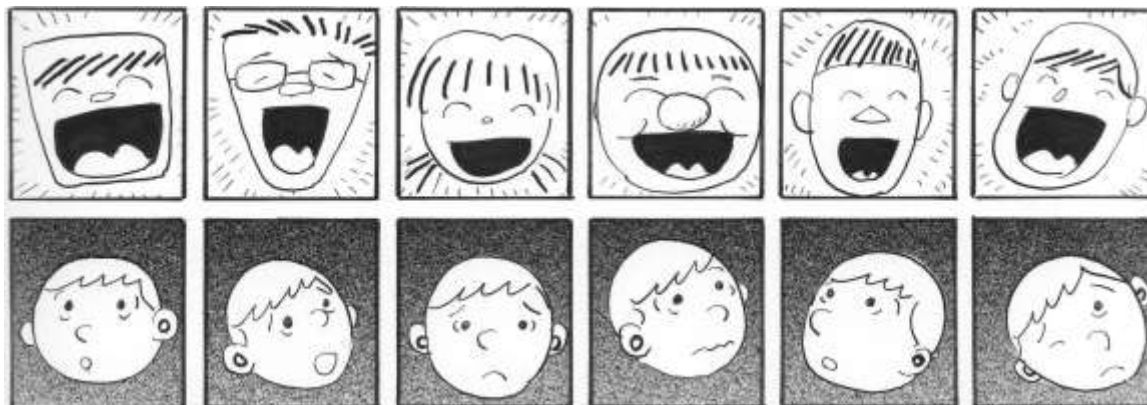
まず、先生の声을直接聞くには2～3m以内に座っている必要があります。それ以上離れると聞き取りが難しくなります。しかし、一番前の席は、先生を見上げることが多くなって疲れてしまいます。

また、先生の声을聞きながら口元や表情なども見えますので、逆光にならないような席に座らせてあげてください。子どもによっては、いちいち振り向かなくても良いので後ろの方が良いという場合もあります。

また、ある学級では、いくつかのグループに分けて机をコの字にならべていました。そうすると教室全体を見渡しやすくなり、誰が発言しているか分かりやすくなります。そして、発言の内容もつかみやすくなります。どの席が分かりやすい席なのか子どもと話し合いながら決めてください。

●発言する時に名前を呼んでください。

友達がいきなり話し始めると注目できないため、聞き逃してしまうことも多くなります。手を挙げてから話し始めたり、先生が発言する子どもの名前を呼んであげたりすると、注目できるのでより分かりやすくなります。声だけではなかなか振り向けない場合があります。こちらを向かせる必要がある時には手を使って合図する方法もあります。



●グループの話し合いは苦手なのです。

学年が進むと、グループで話し合って考えを練り合い、発表するといった学習が増えてきます。グループ内で交わされるたくさんの話を全て聞き取るのは難しいのです。ある時は全員の注目を集めてから発言する場合もあるでしょうが、つぶやきのような話を聞き取することは大変難しいのです。

ざわついた教室の中で、休むことなく話され、2～3人が同時に話している状況では、近くに座っていても誰の話を聞いて良いか分かりません。たくさんの声の中から、一人の話を聞き分けることは苦手なことなのです。一人ずつ話してもらうか、静かな所で話をしてもらえると聞き取りやすくなります。

●教室には聞き取りを悪くしている音があります。

補聴器をかけたままコンピューターの画面に近づくと「ブーン」というノイズが聞こえることがあります。テレビやモーターの近くでも同様なノイズを拾うことがあります。また、プロジェクターのファンや金魚の水槽に使っているポンプなどの音も、補聴器を通すとノイズとして聞こえてしまい、聞こえをじゃまするものになります。ポンプの下にスポンジを敷いたり、いすのガタガタ音を減らすためにいすの脚にテニスボールをつけたりする学校もあります。

子どもと話すときこんな事に気を付けて

●うまく発音できない音は、聞こえない音です。

補聴器を通して聞き取れる音は、発音することが多い場合が多いです。しかし、うまく聞き取れない音はうまく発音できません。難聴の子どもは高い音が聞きとりにくいことが多いのです。高い音の「シ」と「シュ」の聞き分けが難しいので「始業式」と「終業式」の区別が難しくなります。

その場合には、口の動きを見せたり、板書して文字で示してあげたりすると、言葉を正しく受け取りやすくなります。

●子どもの様子をしっかり見てあげてください。

子どもが一生懸命に話を聞いているように見えても「聞こえる」「聞こえない」「聞こえるけれどわからない」という状況が刻一刻と移り変わっているような状態なのです。

子どもが「話の内容が理解できたのか」「話が聞き取れないのか」「どのように聞き取っているのか」「意味が分からないでいるのか」などという、その時々状況を細やかに受け止めてあげてください。

言葉の一部分が聞こえなくても分かるのは、前後関係や状況から推測しているからなのです。この力は、子ども一人一人違いますし、伸ばしていきたい力の一つです。

子どもによっては、聞き取って行動しているのではなく、周りの状況から判断している場合があります。それを見極めるのは難しいですが、状況を的確に判断しているかを見てあげてください。時には判断ミスや勘違いで失敗してしまうことがあります。そのようにならないような教師側の配慮が必要な場面もあります。そのような聞き取りの状況を理解してあげてください。

●五感をフルに使って聞いています。

子どもは補聴器を通した音を聞いているばかりではないのです。聞いているのと同時に、口元や身振りなども見えています。補聴器を通してもしっかりは聞こえませんが、聞こえない部分を補おうとして、口の動きや表情なども大切な情報源としています。

話し手は、もごもごとした話し方にならないようにしたり、ちょっと大きめの声で話したり、表情豊かに話したりした方が内容を伝えやすくなります。「〇〇のことだけど」と前置きすると、その後の話の内容が分かりやすくなります。また、事前にキーワードや要旨などを示しておく、話の内容を推測できます。それぞれの子どもにとって話の内容が分かりやすい方法をとってあげてください。



こんな話し方に注意して

●歩きながら話さない。

学習中に机間巡視などで位置が変わり、子どもの視線から外れたところで話をすると理解が難しくなります。教科書を読みながら教室の中を歩き回ると、どこを読んでいるのかも分からなくなることがあります。口元を隠さないように気を付けてください。

●板書しながら話すと理解できません。

図や絵を描きながら黒板の方に向かって話すと、先生の方に注意が向きません。また、口元も隠れてしまうので、部分的に聞こえた内容から推測して理解しようとするので、分からなくなったり間違えて伝わってしまったりすることが多くなります。板書中は話さないことと事前に板書する内容を掲示できるカードなどを準備しておくなどすれば、板書の時間を短縮でき視覚的でわかりやすい情報になります。

●逆光にならないようにしてください。

話し手の背後に太陽などの光源があると、コントラストが強すぎて見えにくくなります。明かりが話し手の顔にあたる位置に立ってください。

●明瞭な声で自然に話してください。

聞こえにくいという思いで声の大きさを強調した話し方をすると、よけいに分かりにくくなります。ちょっと離れたところにいる人と話をするときには誰しも、声を大きく出そうとしたり口の動きをはっきり見せたりする場合があります。そのような感じで話してみてください。

●適切な速さで話してください。

話し方が速いかどうかはその子どもの感じ方です。どのくらいまでなら聞き取りやすいのかを話し合ってみてください。小学一年生

に話すような速さが一つの目安になるでしょう。

●間をあけて話すことが必要です。

話し言葉が耳に残ってしまう子どももいるようです。その場合には、いくつかの話を続けて話さずに文と文の間に少しの間をとって話してください。一つの文でも、単語と単語の間を若干あけて話すことも有効でしょう。

●子どもが理解できたかを確かめながら話してください。

話をする度に「分かった？」と尋ねながら話すわけにはいきません。子どもの表情を見ながら確かめることが必要になります。また、子どもに理解したことを言わせてみたりしながら確かめていくことも必要です。

●根気よく話してください。

会話の中でも、分からない言葉や意味が理解できない言葉があります。伝わらない時でもいくつかの単語は聞き取っている場合があります。聞き取れなかった場合には、同じ文で話してあげましょう。言い回しや言葉を換えて話すと、一から聞き取らなければならなかったり、混乱することがあります。子どもが分からない顔をしていたり、何度も尋ねてくるときには根気強く応答してください。

●子どもの言っていることが分からないときには繰り返し尋ねてください。

子どもが何と言ったのか分からないときがあります。子どもは言葉を曖昧に覚えていたり間違えて覚えていることもあります。また、正しく覚えていても、上手く話せないことがあります。その時には何と言ったのかを尋ねたり、正しい言葉や言い方を教えてあげてください。手のひらや空書（そらがき・くうしょ）しながら確かめる方法もあります。

こんな事が苦手

●～しながらの会話が苦手です。

テレビを見ながら説明を受けたり、パソコンを操作しながら説明されたりすると、何を話されたのかが分からなくなります。説明を受けてから操作するとか、一つ一つ区切りながら説明していくと分かりやすくなります。説明するときに「ここが」などと指さすと、指示された先を見てしまいます。その時に目が離れてしまって聞き取りが途切れてしまい、分からなくなってしまうことがあります。会話・指示・動作を使い分けると伝わりやすくなります。

●周りの状況をしっかりつかむ。

音が聞こえにくいだけではなく、「聞こえにくいので話の内容が分からない。」こともあります。はっきり聞こえないのでとまどってしまったり、行動が遅れたりすることもあります。友達が話しながら笑っているのに、なぜ笑っているのか分からないときもあります。聞こえにくいことから、経験不足になっていることもあります。

そんなことの一つに、人の気持ちを読み取ることが難しいことがあります。「心の中ではあまり良い気持ちをもっていないのに、笑顔で接している。」という状況をつかむのはとても難しいのです。

●遠くや後ろから話し掛けられる。

ある時こんなことがありました。「友達が後ろから難聴の子どもに話し掛けた。なかなか返事をしなかったので、肩を引いて顔を向けようとした。びっくりして思いっきり払いのけた手が友達の顔に当たった。」ということです。突然肩を引かれたのでびっくりしたのでしょう。突然話し掛けられたり、後ろから呼ばれたりしても分からないことがあるのです。

●ないしょ話。

友達同士でないしょ話をすることがあります。友達が、小さな声は良く聞こえないので、何を話しているのか分かりません。自分でもささやき声で話すのは難しいので、ないしょ話は苦手なのです。

●音程をつける。

難聴でも、音楽が好きで聞いていたりダンスが大好きな子どもたくさんいます。歌を歌うことも難しいことはありません。でも、音程をつかむことが難しいので、抑揚のついた歌い方は難しいのです。

音程がはずれたり、合奏で合わなかったり、リコーダーでオクターブが違う音に気づかないこともあります。

●同じ言葉でも意味が違う言い方。

例えば「ご飯を食べる」という意味には「ご飯を食べますか？」と「ぼくはご飯を食べます」という二つの意味が考えられます。このように二通りの意味が考えられても状況から判断できると、話の内容をしっかりと理解することができます。でも、一つの意味だけで捉えてしまうと間違った行動をしてしまったり、前の話とつながらなくて混乱したりすることもあります。

●言葉のイメージが大切です。

私たちは「りんご」から「赤いリンゴ、あおい(緑色の)リンゴ」「酸っぱいリンゴ、甘いリンゴ」、「固いリンゴ、やわらかいリンゴ」「白雪姫が食べたリンゴ」などいくつものイメージをもって「リンゴ」と話しています。でも聞こえにくいことで、イメージを少ししかもつことができないままに「りんご」という言葉を使っているのです。

あたたかい雰囲気の教室を

●学級の子どもたちに聴覚障がいについて説明してください。

難聴の子どもは補聴器を掛けていることで、周りの子どもたちから珍しがられます。視力の落ちた人はメガネを掛けています。それと同じように、その子どもにとって補聴器は、聞くために必要なものであることを説明してあげてください。周りの子どもに説明するときには、本人の気持ちにも配慮してあげてください。本人とよく相談し、自分がいないときに話して欲しい場合や自分で言いたい場合、保護者から説明してもらう場合など、一番よいと思う方法を選択し、自己決定できるように話し合ってみてください。

子どもたちは、補聴器を通して声や音を聞いているばかりでなく、口の動きや表情も見ています。話すときには対面して話す方がより伝わりやすくなります。

補聴器をかけていても、周りの音を聞き取りにくかったり、発音も不明瞭になったりします。発音の間違いはどの子どもにもありますが、発音しにくい音は一人一人違います。

●実際に補聴器の音を聞いてみるのもよいと思います。

ある学校では、みんなで補聴器の音を聞いてみたそうです。「うわー、こんな音が聞こえるんだ」「大きな音」「うるさいんだね」「先生の声も聞こえる」など、さまざまな反応があったそうです。実際に触ることによって、子どもたちは補聴器のことを知りました。そして、クラス内では補聴器を特別視しなくなったそうです。

先生も補聴器を掛けてみると、周りの音が大きくなることにびっくりされたそうです。いすを引くときの音やものが落ちたときの音の大きさにびっくりされていました。補聴器を掛けることによって、普段何気なく聞いている音も耳に響くことが分かった例です。

●通級についても説明してください。

ことばの教室や聞こえの教室に通級することがあります。ある学校では、教室から出掛けるときに大きな声で「いってきま〜す」と言うと、クラスのほとんどの子どもたちが「行ってらっしゃい」と声を掛けていました。クラス全体が暖かい雰囲気で、楽しそうに出掛けていました。難聴の子どもが別の教室で勉強しているのを当然のように受け入れている雰囲気はとても安心できるものでした。

●分からないときに聞き返せることが大切です。

子ども自身が、自分の分からないことを友達や先生に聞き返せることはとても大切です。聞き逃したことに気付かないこともあるので、周りにフォローしてくれる友達がいると助けてもらえることがあります。周りの子どもは自然にフォローできるように、本人は自然に助けを求められるような雰囲気が学習を助けるのです。



学校生活ではこんなことに配慮を

●全校集会における配慮

ある学校を訪問したときに、体育館に 800 人ほどの子どもが集まっていてビックリしました。そこで、校長先生が話され、先生の説明があったり、みんなで合唱をしたりしていました。難聴の子どもが、このときにリアルタイムで聞き取ることには限界があります。ですから、その場で話の内容が伝わるような配慮が必要です。話し手がキーワードを見せながら話したり、拡大書きを用意したりしておく伝わりやすくなります。また、周りの友達や先生に要約筆記してもらえると内容がわかりやすくなります。一人一台端末で無料の「音声認識アプリ」を使用し、音声を文字化するのもよいでしょう。話の内容がわかっていたら事前に伝えておくことも効果的です。FM補聴器を使っているならば、話し手にマイクをつけてもらうことも必要です。子どもは、「聞こえないこと」や「分からないこと」に気付かないことがあるので、周りの配慮が必要になります。

●避難訓練における配慮

スピーカーからの声は反響したりする関係でとても聞き取りにくいことが多いです。そして、サイレンやベルなどが鳴っていると、声はほとんど聞き取れません。その上赤いライトが回っていたりすると、それだけでわからなくなってしまいうこともあります。訓練だとわかっていてもどうすれば良いのかわからなくなってしまいうことがあるのです。

身の安全を守るためにも、事前に緊急時の行動を説明しておくことが大切です。また、このようなときには友達が頼りになることもあります。協力してもらえようように話をしておくことも効果的です。

●宿泊学習における配慮

肝だめしなどが好きな子どももいますが、夜間は視覚的な情報が得にくくなります。そのために、急に不安になったり消極的になったりすることがあります。また、就寝時には補聴器をはずしているので、呼び掛けても目を覚まさないことがあります。

楽しいことがたくさんあるので、子どもは疲れ気味になります。まれに過労状態から聴力低下を引き起こすことがあります。いつもより聞こえの状態が悪いときには、休養させてください。また、聴力が低下していることが分かったときには、子どもの安全確保に配慮をお願いします。

●校外学習における配慮

列車がトンネルを通過してから「耳がキーンとする。」と訴える子どもがいます。気圧差で耳が痛くなったり耳鳴りが続いたりすることがあります。あらかじめ飴をなめさせておいたり、水やつばを飲ませたりあくびをさせるなどの対処をしてください。（耳抜き）

歩きながら子どもに話し掛けるとき、顔を見合わせながら話していることで、前方に注意が向かないことがあります。電信柱にぶつかったり、段差によろけたりすることもあります。集団の流れも大切ですが、その子どもに合わせた活動の仕方を大切にして指導していくことも心掛けてください。

遠く離れた場所やざわついた場所で聞きとることが難しいのです。また、スピーカーから流れてくる解説を聞き取ることも難しいのです。拡声器を使っの説明も、聞き取りが難しいのです。そんなとき、要旨やキーワードがあるだけでも理解を助けてくれます。

友達（バディ）づくりの手助けを

●気が合う友達ができると、輪が広がっていきます。

難聴の子どもたちは、乳幼児期から自宅から遠い聾学校に通うなど、近所の子どもたちと接する機会が少ない場合があります。週末に近くの公園に出掛けても、同じ年頃の子どもたちは幼稚園の友達同士で遊んでいて、遊びの中になかなか入っていけないことが多いようです。その時に、先生や保護者が遊びの中に入り仲立ちをしてくれると比較的スムーズにとけ込めるようです。そのなかで、一人二人気の合う友達ができると、その友達と一緒にほかの友達と遊ぶことができるようになります。保護者同士の仲が良いと子ども同士も仲良くなる傾向があります。

●気の合う友達の名前を保護者に教えてください。

幼稚園や小学校で仲の良い友達の名前を保護者に伝えてください。家庭で話をするときに友達の名前を知っているととても役立ちます。また、保護者同士が知り合いになっていると子どもの様子を知ることもできます。顔見知りになっていた方が子どもも安心して遊ぶことができます。その子どもの興味や特技などを話しておく、それを話題に友達が広がっていくこともあります。

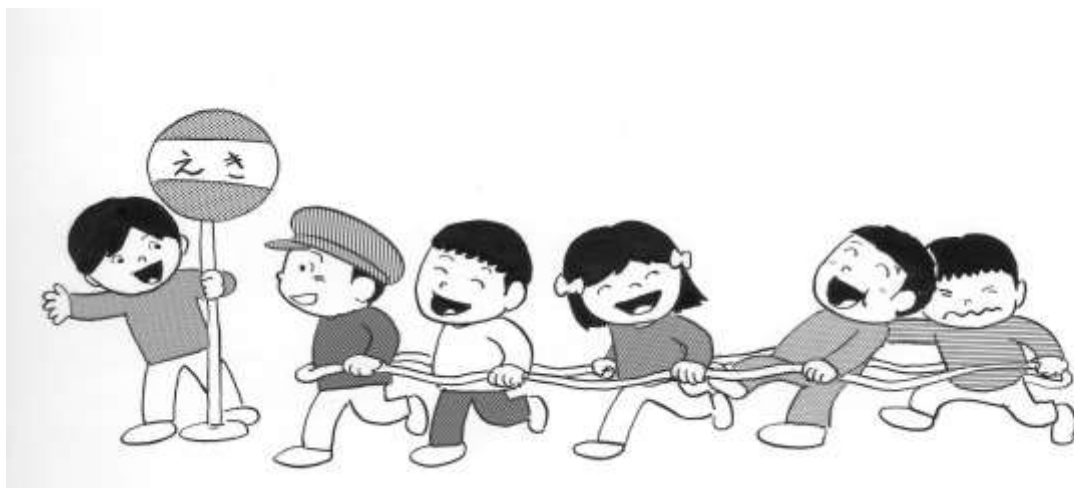
●遊びを広げることも大切です。

乳幼児期から聾学校へ通ってきている子どもたちは、いろいろな遊びを経験していないため知らないことが多いです。年少の頃の遊びは、ルールや順番を守ることの大切さも教えてくれます。たくさん遊ぶことによって体力も付き、思考力が付いたりします。

家庭に帰ってから遊びの中で体験したり学んだりしたことをもとに、さまざまな話ができます。それが言葉を覚えるチャンスになるのです。たくさん遊ぶことによって、たくさんのかことを覚えることができるのです。

●グループでの話が苦手です。

対面しながら一対一での話は理解しやすいのですが、グループの中で複数の友達が話していると、聞き取ることが難しくなります。教室や外で遊んでいる時には周りにいろいろな音や声があります。その中で必要なことを聞き取るとは難しいのです。また、話し手がすぐにかわると、話の内容を追いつけることが難しくなります。子どもは、話し手の顔や口元を見えています。次に話す人が分かり、その人の方を向いて聞く準備をします。その準備ができないと聞き取りは難しくなります。それぞれの子どもに合わせた伝え方を工夫していく必要があります。そばに、仲の良い友達がいるだけで安心できるのです。



学習指導上の 配慮について



教えるときこんな工夫を

- 先生が話すときは、子どもによく見ることや良く聞くことを促してください。

子どもがこれから学習していくときに、できるだけ多くの情報を受け取ってほしいものです。そのためにも、子ども自身がよく聞いて、よく見ていることが大切になります。

- 先生が話したことを、子どもに繰り返し言わせたり質問に答えさせたりすることで理解の状態を確認してください。

子ども自身でも「分からないことが分からない。」という状況で聞いていることもあるのです。また、はっきり言葉が聞き取れないこともあるので理解が曖昧になってしまいます。内容を理解しているかどうかを確かめてあげることが必要なのです。

- 子どもが理解できていないようならもう一度分かりやすく話し掛けてみて、“やさしい（平易な）言葉”で言い換えてみてください。

学年が進むにつれて、使われる言葉が難しくなってきます。新しい言葉は聞き取ったり、理解したりすることが難しいので、まずは聞

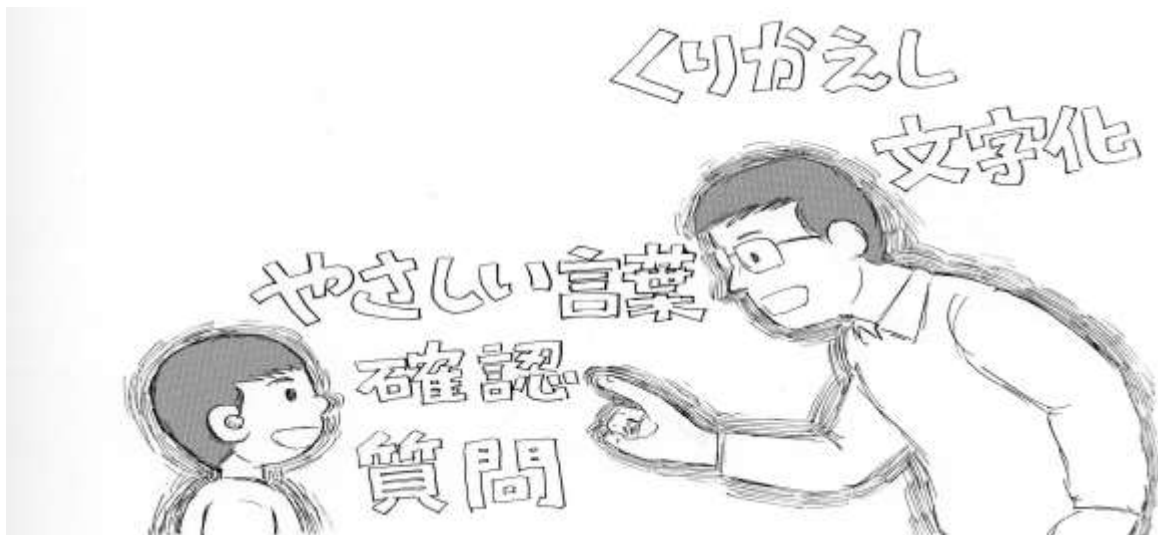
き取れるように話してみて、理解できないようならやさしい言葉で言い換えてみてください。

- 新しい語句やトピックスなどは黒板に書いてください。

話し言葉では聞き取りにくい内容でも文字で表すと分かりやすくなります。しかし、文字の使用に偏ってしまうと、聞き取る力が身に付きにくくなります。言葉を覚えるときには分かりやすく伝え、その後には使い慣らすことが必要です。

- 教室での話し合いの時、子どもたちの発言を、先生が繰り返したり言い換えたりして伝わりやすい配慮をしてください。

大勢の中で会話を聞き取ることは苦手です。活発な話し合いでは、誰が話しているのかが分からなくなってしまうこともあります。先生が「今の意見は、〇〇君の意見と同じで…」とか「その考えは△△ということですね。」などと言ってくれるだけで、自分の聞き取った内容を確認することができ、安心することができます。



学習中、こんなことに気を付けて

●視覚的な情報を増やしてください。

物語文には挿絵があるように、図や写真、グラフなどがあると理解を助けます。話し言葉が多いと、「その言葉は何と言っているのだろう?」「それはどんな意味だろう?」などと考えているうちに学習がどんどん進んでしまいます。

教科書の「よく見るとコンクリートのわれめや、高い石がきのすきまにもさいています。」という文の「われめ」「すきま」という言葉を知らなくても、写真があれば文の内容を想像しやすくなります。その後「どんなところにさいているのでしょうか?」と質問して答えられないときには、写真を用いて説明することができます。

補聴器を掛けていても、十分に意味をつかむためには視覚的教材が必要で、効果的に理解を助けてくれる場合が多いのです。

●ICT機器の活用

タブレット端末を活用して、活動の中で音声認識アプリや筆談アプリなどを使用することも情報保障に効果的です。例えば、音声認識アプリでは、声を文字化してくれるので、聞き漏らしがあっても文字で確認できます。また、正しい発音で言えているか、この機能を活用して確認することもできます。筆談アプリでは、その場で書いてすぐに伝えたり、言葉等で伝わりにくいときには、文字や絵にして伝えたり活用できます。子どもは、聞こえない部分を補おうとして、口の動きや表情なども見て情報源としています。このようなアプリを活用することで、学習へ取り組む際の安心感につながります。

●分かりやすいジェスチャーや身振りなど理解の助けになります。

よく外国に行って言葉が通じないから、身振りだけでどうにか通じたという話を聞きます。こちらの意図を身振りやジェスチャーで相手に伝えることができます。

よく魚の大きさを表すのに、まずは手を広げて「このくらい」と伝えます。その後何cmくらいかなと話します。このように、身近な物の大きさなどは、言葉で言うよりも伝わりやすい場合があります。しかし、言葉でもしっかりと伝えておくことが大切です。

長さのほかに大きさや広さ時間などの感覚がつかみにくいようです。具体的に見せられるものであれば、「このくらい」というように感覚的につかませてあげることも大切です。程度を表すのに、半分とか30%、7割くらいなどの表現を使いますが、まだ学習していないこともあるなど、なかなか伝わりにくいようです。そこで、「全体のうちのこのくらい」ということを表す図を板書したり、手の広げ方で表したりすると分かりやすくなります。また、「ぼくは横目でちらっと見た。」というような表現も、実際にやってみるとその時の心情や様子も想像しやすくなります。(動作化)

●課題や新しい語句、キーワードを板書すると理解を助けます。

勉強の始めに「今日は、昨日つかまえたチョウを観察しましょう」と言って、黒板に「モンシロチョウをしらべよう」と書いておくだけで学習の内容をつかみやすくなります。また、新しい言葉が出てきたときには、聞き間違ったまま覚えてしまうことも少なくありません。新しい言葉や難しい言葉、キーワードにあたる言葉などは黒板の端やカードに書いておく覚えやすくなります。

語彙の拡充を

●語彙量が少ないのです。

多くの言葉は耳で聞いて覚えます。しかし、聞こえが悪ければ、耳で聞いて言葉を覚えることが難しくなります。

聾学校の幼稚部ではさかんに語彙指導を行っています。そこではまず、生活経験を通して言葉の概念をしっかりと扱います。そして、言葉の中心的な意味から徐々に複数の意味を扱っていきます。しかし、その時には分かっているにもかかわらず定着しないことも多いのです。ですから、いろいろな場面で意識的に使い慣れるように心掛けていきます。とくに抽象的な言葉は多くの経験をしないとなかなか理解できません。偶然に出会った場面だけでは経験不足になるので、意図的に場面を作って指導していきます。

●言葉のイメージを拡げてください。

子どもが分からない言葉は、会話や教科書を読むときに表れてきます。分からない言葉や曖昧に理解している言葉は、その場で教えてあげることが大切です。時間が経ってしまうとなかなか定着しにくくなってしまいます。

また、ある言葉一つだけを教えるとすぐに忘れてしまうことが多いようです。子どもの知っている言葉と結び付けたり、感情や過去の経験と結び付けたりしながら意味を教えてあげると覚えやすいようです。

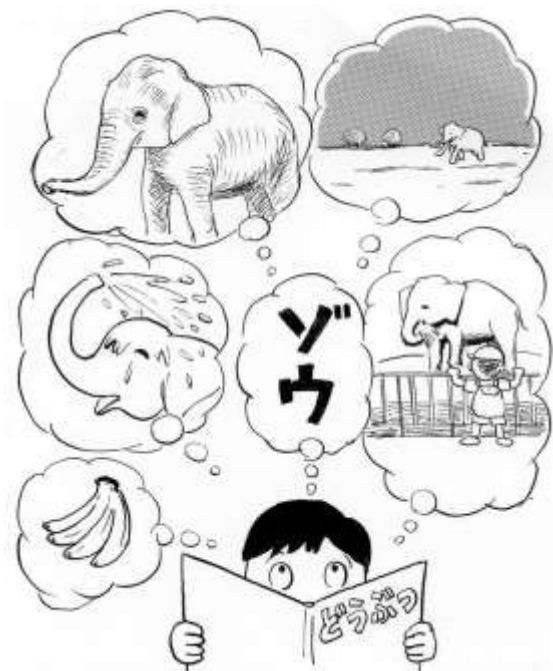
例えば幼稚部で絵本を読みながら「ゾウ」という言葉を扱うことがあります。そのときには「ゾウ」という言葉だけを教えるのではありません。体の名称とか外観、ゾウの特徴的な行動や仕草、一般的に知られていること、ゾウを見た経験を聞いたり「やさしそう」などといった情緒的な面も話したりします。絵本の背景から、住んでいる場所や働きなども

一緒に伝えるようにします。このように、言葉を教えるばかりではなく、ゾウにまつわるいろいろな事柄を扱うようにしています。このような話し掛けが言葉のイメージを上げ、概念を形成していくのです。

●いろいろな見方ができるようにしてください。

子どもたちは、聞こえにくさから情報不足になりがちです。そして、少なからず社会経験も不足してしまいます。ですから、普段から人の気持ちや立ち回りの振るまい、物の名称や使い方など、年齢相応に知っておくことについても話し掛けて欲しいのです。

言葉を教えるときに、だれが・どこで・どうやってなどというように人との関係や社会一般ではどうかという観点で、子どもの知っていることをもとにして、見方や考え方を増やしてあげてください。このような指導をていねいにしていくと、探求心をもちやすくなったり、自分から考えるようになったりしていきます。また、読書好きの子どもは、語彙も豊かになる傾向があります。



教科書や補助教材の使い方

●家庭にも教科書を用意してあると便利です。

子どもたちには無償で教科書が配布されています。それとは別に家庭学習のための教科書があると予習をすることができます。学校では先生が十分な配慮をしてもすべての話を聞き取ることは難しいのです。先生が話す言葉や友達が話している言葉を聞き取るだけで大変な労力を必要としているのです。その上、教科の内容を理解していくには、それ以上の努力をしているのです。

家庭で予習をしておく、先生や友達の話がすべて聞こえなくても予測することができます。そこから学習の内容を予測しやすくなります。聞こえにくいということは、新しい言葉や事柄に出会ったときに理解しにくいものなのです。そこから内容が理解しにくくなってしまいます。ですから、家庭で予習をして学校でその内容を広げていく方が子どもたちにとって理解しやすくなります。

●補助教材はいくつかあった方が良いでしょう。

知らないことを教えてくれたり、曖昧なことをはっきりさせてくれたりする補助教材は学習内容を助けてくれます。聾学校の幼稚部では「ことば絵じてん」を使います。年齢に応じて国語辞典や漢和辞典も使うようになります。そのほかに、歴史年表や百科事典などは学校に用意されています。理科や社会の資料集などを使うと視点を定めやすくなり考えやすくなるようです。また、視覚的にも分かりやすいものですので、自学自習にも役立ってきます。

家庭学習用に、教科書に準拠した問題集を用意するのもいいでしょう。教科書の単元に合わせた内容で、解答も分かりやすく書かれているので、保護者にも心配をかけなくても済みます。問題集をやることで、授業では曖昧

昧だったり分からなかったところが分かります。そこをもう一度復習するときに使います。

子どもが、自分で勉強ができるようになるために、周りにいる先生や保護者の力が大切になってくるのです。将来応用できる力を育てるためにも、確かな学力を育てていきたいものです。そのために、学校と家庭が協力し合って支えていくことが大切になってくるのです。

●教科書を音読させましょう。

国語の教科書だけでなく、どの教科書も音読する習慣を付けましょう。そして、一緒に聞いて間違っているときには直してあげてください。漢字の音訓の読み間違いをする場合が多いです。音の記憶が少ないために「白老(しらおい)」を「はくろう」と読んでしまうことがあります。

小学校の低学年で黙読させていると文章の読み違いや読みとり方を間違ってしまうことが多くなります。教科書を音読する習慣があると、自分の分からないところや理解しにくいところでは2～3回繰り返し読むようになってきます。それを、周りの大人が気付くことで助けることができるのです。

●教科書に書き込みをしていきましょう。

子どもたちに、教科書の「分からない言葉に線を引きましょう。」と言うと大半のところに線を引くことがあります。難語句調べのために別にノートを作らせるとそれに時間をとられて効率的ではありません。教科書を読みながら、分からない言葉があったら、文章から推測させたり分かっている事柄から推測させたりします。それでも分からないときには教えて、教科書に書き込んだり、マーカーでしるしを付けたりしておきます。

学力を付けていくために

●小学生のうちに十分に養っておきたいものです

教室での先生の説明や指示、友達の答えややり取りなどが十分に聞こえていません。ですから、以前は、聾学校での教科指導は二年ほど遅れると言われてきました。

小学校中学年から高学年になってくると、学力を取り戻すことが難しくなってきます。ですから、小学校入学からきめ細かく指導をしていくことが必要になってきます。その子どもにあった指導の仕方は、やり取りの中から見付けていきます。難聴の子どもは一般的に、語彙が少なく言葉の意味を理解していないことが多く、質問したり発表することが少なく、集中する時間が短くて人の話を聞こうとしなかったりする傾向があります。

しかし、一人一人、聞こえ方も違いますし、考え方や受け止め方も違うのです。子どもの考え方や表し方を受け止めてあげながら、必要なことを教えてあげてください。

教科書も文章で書かれています。新しい知識や情報を受け取っていくには、文章から得ることが多いのです。ですから国語の力や読書力が高ければ教科の内容が読みとりやすくなり理解しやすくなります。生活力を付けるためにも国語力や読書力を高めていくようにしたいものです。

●文章を暗記するのも大切です

暗記というと「丸暗記」というイメージがあり、あまり意味のあることではないように受け取られます。しかし、文章を記憶することは学習する上で大切なことです。中学生から勉強していく英語では単文や単語などをたくさん覚えていかななくてはなりません。ここでも記憶力が大切になってきます。記憶力が良いと学習した内容をたくさん覚えていくことができます。すらすらと覚えていくことができれば、勉強が楽しくなっていくでしょう。

教科書には、年齢に合わせた内容で、手本となる文が書かれています。国語の教科書を暗記するだけでもかなりの文章を覚えることができます。それが、内容理解を助けるだけではなく、話し言葉にも使われたり自分の言葉として記憶されたりしていきます。

●家庭学習も大切です

塾や家庭教師がついて勉強することがあたり前のような時代になっています。子どもたちも学校での学習内容をすべて理解することは難しいものです。ですから、家庭で保護者が勉強を見てあげることが必要になる場合があります。そのときには、そばにいて教科書の内容や問題の内容を分かりやすく伝えていくことが必要になります。塾に行きたくても受入れが困難と言われるケースも多いからです。

土曜日や日曜日も学習する時間を確保して家庭学習の習慣を付けましょう。小学生時代には30～40分が適当だと思います。その時間でできる内容を集中してやれると学力が高まっていくようです。そのほかにも、読書の時間や作文や日記の時間が確保できればより学力が高められます。



苦手な文について

●難しい単語が使われている文が苦手です。

知っている語彙も少なめで、抽象的な言葉はうまく読み取ることが苦手です。ですから、文を読み取るときには自分の知っている部分だけを手がかりにして読み取ります。また、動詞の変化や助詞を正しく理解できないので、意味を取り違えることもあります。

知っている単語をつなげて読み取りますが、自分の経験をもとにして意味を考えています。ですから、文法的な解釈よりも自分でつじつまが合うような解釈をすることが多いようです。

●受け身、やりもらい文、複文、長い文は苦手です。

文の最初に出てくる人物を主にして、次に出てくる人物を対象者ととらえることもあります。「太郎が花子におやつをあげた。」という文では意味の取り違えは少ないですが、「太郎に花子がおやつをあげた。」という文になると意味を取り違えることがあります。助詞の「が」は動作をする人で、「に」「を」はそれを受け取る人と捉える傾向があります。

小学校三年生くらいから教科書に複文がたくさん出てきます。「太郎が泣いている花子にお菓子をあげた。」という文を、文の頭から読み取っていくので「太郎が泣いている。」で区切ってしまいます。すると「太郎が泣いている。花子がお菓子をあげた。」と読み取ってしまうことがあります。

また、「～してあげる。」と「～してもらう。」の言い回しは立場がわかりにくいのです。「今日友達が家に遊びに行くから(来るから)」「クッキーを作ってくれてね(あげてね)」など、「遊びに来る」と「遊びに行く」の間違いも多く見られます。

●一人一人に合わせた指導が必要です。

一般的に「問題に正解すると理解できた。不正解だと理解できなかった。」と捉えがちです。しかし、文の解釈については、子ども一人一人がそれぞれの「文法」を持っているようなものです。その子どもに合わせて、間違いの傾向を捉えて指導していきます。

やりもらい文や受け身の文は実際に動作化すると分かりやすく説明することができます。「太郎が花子にコーヒーをいれてくれるように頼んだ。」という文も同様です。

単語の関係を表すときに、矢印を使って方向性を示すとか移動先を示すなど、図などに置き換えると分かりやすいことがあります。一度聞いただけで分かりにくいときには、途中で区切って考えるなど視覚的に表すと間違いが少なくなります。

文法を教えることも大切な指導になります。しかし、なかなか覚えにくいのも事実です。「泣く」という言葉は動作を表します。状況を詳しく表すときには「泣く」だけの表現だけでは足りなくなります。

しかし、文法的に「泣けば、泣くとき、泣こう」などと教えても覚えにくいものです。その状況にあったところで使い、聞かせて、言わせて、書かせてみるということが必要になってきます。日常場面で意識して「泣いている、泣いてしまう、泣き通す、泣き始める、泣き終わる、泣こうとしている、泣きそう」という変化のある言葉を使い慣れさせることが必要です。

また、先生が「どのように解釈しているのか。」を子どもに伝えていくことも必要です。頭の中に描いていることを伝えることで、内容を理解できることもあります。

国語ではこんなところに気を付けて

●漢字を使い慣らしておきましょう。

漢字を覚えられないで困っていると、教科書の読みが遅れていきますし、意味をとらえるのにも困ってしまいます。

なかなか覚えられない子どもたちには、何かゴチャゴチャした複雑な形のように見えているようです。ですから、国語の教科書に出てきた漢字は一年生のうちからしっかり指導していきます。市販のドリルなども使って、音読み・訓読み、筆順、送りがな、画数、部首も覚えていくことが大切です。漢字練習の時には一字だけを練習するよりも、送りがなと一緒に声を出しながら読むと覚えやすいようです。

また、「へん」や「つくり」、「かんむり」などの部首を意識させることも漢字を覚えやすくする方法の一つです。漢字の部首がすぐに見つけられるようになると、覚えも早くなってきます。そして、漢字を教える時にも「糸へんに白と水と書くと線という漢字だよ。」と伝えることもできます。漢字は、学習障がい等の障がいによる習得の困難さをもつ場合以外は、努力すれば必ず成果が出る分野です。継続した努力の習慣を身に付けさせましょう。

●新しい語句を文脈の中で指導すると効果的です。

語句は、単語で取り出して覚えるよりも文章と一緒に覚えた方が効果的な場合が多いです。文脈の中で、語句を意味付けた方が覚えやすいのです。そして、知らない語句に出会った時にも、文脈の中で前後の語句の意味から推測することもできるようになります。

私たちは日常使っている語句の意味を説明できなくても、自由に読み書きができます。

そこには使い慣れということが関係していると考えられます。子どもに指導する際は、難語句の意味をていねいに説明して教えていきますが、それだけでは語彙量はなかなか増えていきません。難語句が含まれている文を、声を出しながら又は手話で意味を確かめながら何回も読むことが理解を助けてくれるようです。教科書を黙読しているだけだと、語句や文が子どもの心になかなか残っていきません。意味理解をし、全文を暗記するほど何回も音読していると内容理解が早まります。

難語句を覚えるときに、ノートに書き出していく方法があります。ほかの方法として、教科書に意味を書き込んでいきます。文章を読んでいくとき、難語句の意味を見ながら教科書の音読ができます。文章と一緒に意味を覚えていく一つの方法です。

子どもの国語の力を伸ばしていく時、国語の教科書を扱っているだけでは足りないことがあります。やはり、読書量が多い子どもの国語力の伸びは、大きくなる傾向にあります。乳幼児期からの絵本の読み聞かせも大切です。ストーリーを追ってしまうマンガは、国語の力にあまり影響を与えません。しかし、マンガの載っている歴史や科学の本などは内容がわかりやすいようです。国語の力を伸ばすためにも、読書をすすめていきたいものです。

国語の展開例

※これらの例はあくまでも一例です。児童生徒の実態によって大きく配慮事項が変わります。

●展開の工夫

国語の授業を進めていくときに、うまく言葉を受け取れないことや教科書を読んでいても理解できない言葉があります。

この文章は二年生で扱う「鳥のちえ」です。ここではささごいの知恵を読み取ります。

ささごいが、小さな虫をくわえて池のはしにいます。虫を水の上におとすとその虫を目がけて、魚が近づいてきました。すると、ささごいは水の中にくちばしをつっこんで、あっというまに魚をくわえてしまいました。このように、ささごいは、虫をつかって魚をおびきよせ、つかまえることができるのです。

例文のように、「前半部分が様子を説明している文章」と「後半部分が前半部分をまとめている文章」であることなど、文同士の関係を読み取ることが難しいのです。そして、魚には鳥の存在が知られていないことを理解していないことが多いのです。そこで展開にも工夫が必要になってきます。

ここでは、挿絵と文を対応させながら文章に即して読んでいきます。もう一つの方法として、「おびきよせる」を中心とした展開も考えられます。例えば「ささごいはどうやって魚をつかまえますか？」と質問して「魚をおびきよせてつかまえる」をひきだします。そして「おびきよせるとはどういうことですか？」と質問して、子どもが自分の知っている「おびきよせる」を説明させたり、ささごいが魚をおびきよせている様子を読み取らせたりしながら前半部を扱っていきます。

子どもが答えた時に「理解できた」とするか「表面的に抜き出しているだけ」ととるかで、子どもの理解度がかわってしまいます。

●大造じいさんとがん

そこで、残雪がやってきたと知ると、大造じいさんは今年こそは、とかねて考えておいた特別な方法にとりかかった。

それは、いくつものえさをあさる辺りに、一面、くいを打ち込んで、タニシをつけたうなぎつりばりを、畳み糸で結びつけて置くことだった。じいさんは、一晩中かかって、たくさんのうなぎつりばりをしかけておいた。

今度は、なんだかうまくいきそうな気がしてならなかった。

難語句となりそうなのは、「たにし」「うなぎつりばり」「畳み糸」「くい」だと思われるので、図鑑や挿絵から説明しておきます。

ここで「大造じいさんはどうしたの?」「特別な方法とはどんな方法ですか?」「どのくらいの時間がかかったのですか?」「そこでどんな気持ちになったのですか?」という発問や「罾を仕掛けた時の気持ち」も文に即して答えられる場合が多いです。しかし、表面的な文を追っただけの読み取りになってしまう危険性があります。

ここでは「なんだかうまくいきそう」という心情を理解することが大切だと思われます。「なんだか」という気持ちに表れた「一晩中かかった大造じいさんの行動」を読み取ることが大切になります。子どもの読みとりをつながけながら、じいさんの行動と心情を細かく読み取っていきます。子どもと話し合い、広げていくことが大切な方法だと思います。このくらいが、一時間の範囲になります。

算数ではこんなところに気を付けて

●計算力を伸ばすことを心掛けましょう。

文章を読みとることが苦手な子どもの場合、文章題も苦手になってしまうことが多いようです。しかし、計算問題や文章問題を数多くこなした子どもは計算力が伸びることもあるようです。

計算問題を進めていく時、多くの反復練習を必要とします。高学年になってくると、この反復練習が単純な作業のように受け取られておもしろさを感じなくなってしまうます。低学年では、友達と競い合うなどご褒美をもらいながら楽しそうにやってくれます。低学年のうちに、繰り上がり・繰り下がりのだしざん・ひき算、かけ算と九九などの学習で計算力を高めておきたいものです。そのときには、教科書の問題だけでは足りないので、市販のドリルやプリントを作成して何回も練習します。

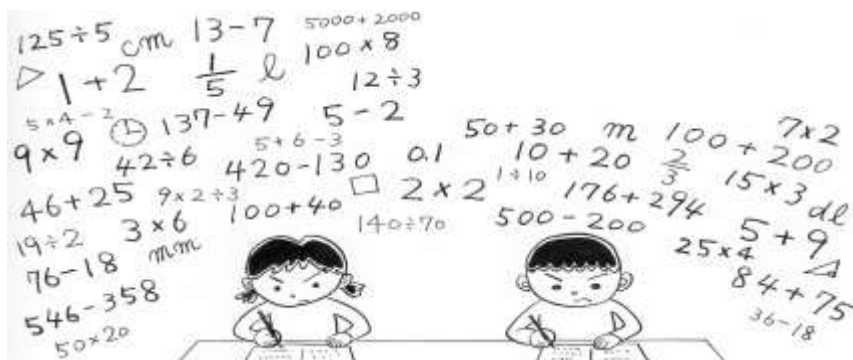
算数は感覚でとらえるものではなく、決まった答えを導くところに子どもたちはおもしろさを感じるようです。粘り強く問題に取り組んでいけるようになると、算数が得意になったという子どもが多いようです。

●多くの文章題を解くことが大切です。

計算力が高まって、文章を読みとれなくて立式できずに、文章題を苦手だという子どもが多いようです。文章に出てくる語句で「あげた、もらった、分けた、買った、人数で分けた」などの意味が分からなくて式を立てられないことがあります。

「駅から花子さんの家まで 500m、駅から太郎君の家まで 800m…」という文章題の時には、その位置関係を捉えられないでいるのかもしれない。子どもと話し合いながら、どこにつまずいているのかを分かってあげることが大切です。そして分からない言葉を、図や絵を描いて説明します。そして、文の内容を理解させてから、 $+$ $-$ $\times$ $\div$ のどれが当てはまるのかを考えさせていきます。でも、子どもは「今は分数のだしざんを勉強しているから $+$ を使います。」と無条件に当てはめてしまうことがあります。文章の内容を理解させるために、図や数直線、教科書の挿絵を有効に使っていききたいものです。最終的には自力でできるように導きます。

用語や公式は、紙に書いて張り出しておきます。普段の学習の中で自ら学習を振り返り学習内容を身に付ける環境を作るためです。公式を用いる際は、安易に文章に出てきた順に数字を当てはめていないか確認します。その数字や語句の意味するところを確認しながら立式しているかを見てあげることが大切です。



社会や理科ではこんなところに気を付けて

●国語の力と経験が大切です。

社会や理科の教科書を読むには、説明文を読む力が大きく関係してきます。たくさん読書をしていても物語文だけ読んでいて、時事に関する文や科学の読み物を読み、雑学を身に付けていないと、社会や理科の教科が苦手になるようです。社会と理科の勉強が始まる三年生までに、国語の(特に説明文の)力を高めていくことが大切です。

社会一般の常識をたくさん知っている方が学習には有利になります。テレビニュースを見たり新聞を読んだりする習慣を付けたり、保護者が分かりやすく説明してあげることも大切です。学校でも、最近のニュースを話題にすることも大切です。身の回りの出来事に目を向けられるようになると、「疑問」がわいてきます。そこで、年表や地図を貼っておいたり地球儀や伝記などを身近に置いたりしておきます。

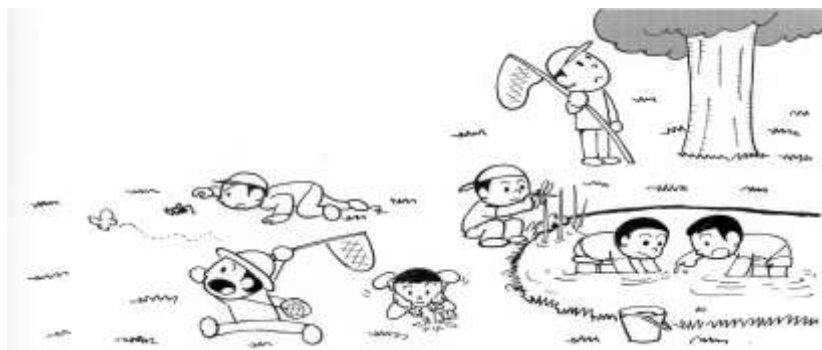
理科では、普段から植物や昆虫に触れていることで生きた知識が見に付きます。身の回りの自然現象を見て感じる大切なのです。これは、幼児期や小学校低学年までの経験によって大きく左右されることが多いようです。保護者の方は、特に虫を嫌がります。そのような姿だけを見せて育てると、子どもも嫌いになってしまうことが多いのです。学校でも昆虫を探しに行きますが、それだけでは足りません。休日や夏休みに戸外へ出かけ、花を摘んだり昆虫を捕まえて飼ったりして、季節の移り変わりを感じる経験が学習に役に立ちます。

●考え方をしっかり学習させたいものです。

小学校の社会と理科では、三・四年生で準備をして、それを基に五・六年生の内容を学習していきます。そこには、子どもたちにとっての難語句がたくさん出てきます。社会の教科書では、読める(音読できる)けれど意味の分からない文章がたくさん出てきます。子ども一人一人で分からないことは違うのですが、学習するためのプリントや考え方をまとめていけるプリントを作成してあると理解しやすくなったり、板書をノートに書き写す時間を短くしたりできます。社会や理科の教科書に出てくる難語句は教科書に意味を書き込ませることを許可します。そして、意味を見ながら教科書を音読させることで理解を容易にさせます。

その上で、「これはどうなっているのだろう。」「どうしてだろう。」「どうやったら確かめられるだろう。」「実際に確かめてみよう。」「こういうことが分かった。」という考え方を学ばせていきます。

また、歴史で必要な年号や重要人物、大切な語句はマーカーで線を引かせ、教科書には書き込みをして良いと伝えてあげてください。



体育ではこんなところに気を付けて

●補聴器や人工内耳に気を付けてください。

補聴器は精密電子機器です。防水機能はない場合が多いので、水や汗には弱いのです。ですから、水泳学習の時には補聴器や人工内耳をはずすことになります。補聴器等をかけているときの聞き取りが良くても、プールでは聞き取りが期待できません。そのための配慮が必要になることがあります。

水泳学習では、事前に補聴器や人工内耳をどこに置いておくかを決めてください。プールの更衣室まで持って行く場合には、密閉容器に乾燥剤を入れて保管させてください。そして、事前に伝えられることは事前に伝えておいてください。プールに入ってから、ジェスチャーなどを使うと伝わりやすくなります。泳いだ後は、耳の中や髪の毛を乾かしているかどうか確認してください。

器械体操の時に補聴器等をはずすかどうかを、子どもと話し合っておいてください。マット運動や鉄棒の時などに補聴器がはずれることがあります。故障やけがを防ぐために補聴器をはずした方がよい場合もありますので本人や保護者と話し合っておいてください。



●子どもへの伝え方に配慮をお願いします。

体育館では子どもたちも元気に動き回りしますので、たくさんの声や音が反響しており、様々な音が鳴っています。グラウンドでは車の音や風の音など私たちが気付かない音もたくさんあります。このような環境では、子どもに話が伝わらないことがあります。

○体育館やグラウンドでの雑音は話し声を聞き取りにくくしています。できるだけ近くで、伝わりやすい距離で話してください。

○説明や指示の時にホワイトボードに書いて示しておいたり、手本を示したりすることでわかりやすくなります。

○スタートの合図に笛やピストル、手を挙げたり、手をたたくなどの方法を試してください。

○そばに仲の良い友達がいると、伝えてくれることがあります。お互いの負担にならない程度にお願いするのも一つの方法です。

●ほかの疾患に対する配慮が必要なこともあります

感音性難聴の場合に平衡器官にも障がいがある場合があります。目を閉じると立ってられないなどの症状を現すことがありますので鉄棒や平均台などには注意が必要です。中耳炎で鼓膜を切開しているときにはプールや水遊びはできません。^{ぜんていすいかんかくちょうしょう}前庭水管拡張症をもつ子どもは、プールでの潜水と飛び込み、サッカーでのヘディングは症状を悪化させますので注意が必要です。子どもの障がいの状態や学校で注意しておくことなどを保護者と話し合っておいてください。

音楽ではこんなところに気を付けて

●楽しい音楽を経験させてください。

聾学校の子どもも音楽を聴いて楽しんでいます。音楽を聴いて覚えた振り付けを発表していたこともありました。最近ではピアノやダンスなどを習う子どももいます。音楽の時間に覚えた曲を、廊下を歩きながら歌っている場合もあります。このように、子どもたちにとって音楽は遠い存在ではないのです。

子どもが音楽を楽しんでいるからといって、私たちと同じように音楽が聞こえているわけではありません。子どもの聞こえ方を想定して作った音楽のシミュレートを聞いてみると分かるのですが、音程やメロディーそしてハーモニーを聞き取るのは難しいのです。楽器の音もどこかペラペラとしたようで、響きが失われているような感じを受けるようです。しかし、リズムはしっかり受け取ることができます。最近の音楽の教科書にはフォークソングや外国の曲を歌うようになってきました。聾学校の中学生もアイドルの曲をよく聴いているようです。また、バスの中ではテレビ番組で覚えたゲームなどもしています。その子どもの興味により違いもありますが、音楽を楽しませてあげたいものです。



●音楽を楽しめる配慮をお願いします。

一人だけ特別扱いされることは、子どもの気持ち（自己肯定感）を下げてしまうことがあります。一番大切なことは、「みんなと一緒に楽しめる」ことだと思います。ですから、学習中に次のようなことに気を配ると子どもたちが楽しめるようになると思います。

○拍子とリズムのはっきりした曲が聞きやすいようです。そのような曲ではないときに、伴奏を変えるなどしてリズムカルにすると分かりやすいようです。

○子どもが聞きやすい楽器があります。和太鼓やドラム、マリンバ、カスタネット、ベース、トロンボーンなどは聞き取りやすいようです。ピッコロやトライアングルなどは聞き取りにくいようです。リコーダーや鍵盤ハーモニカ、キーボードなどは聞き取りにくい音もありますが、練習していくと上達していきます。

○低学年のうち、音楽に合わせた振り付けがあると、より楽しめるようです。

○音程が大きく変わる曲やテンポの速い曲では、遅れてしまうことがあります。

○教科書だけではなく子どもの好きな曲を選ぶのも一つの方法だと思います。

○歌い出しのところで「いち・に・さん・ハイ」などの合図があると入りやすくなります。また、演奏を休むところや合わせるところなどの合図が大切です。

○リズムが分かる手拍子や指揮があるとリズムがわかりやすくなります。楽譜を見ながら演奏しているときには、肩をたたいてあげるのも一つの方法です。

家庭でも学習の手助けが必要

●言葉を意識した生活に心掛けてください。

学校で学習したことを、再度家庭で復習することは大切です。繰り返すことで、しっかり定着したり、曖昧なところがはっきりさせたりするからです。

でも、家庭学習で大切なことは、今日の出来事を親子で話し合うことだと思います。「今日学校でこんなことがあったんだよ。」とか「明日までにノートが必要なんだ。」という一言から、どんなことがあったのか、どんな勉強をしているのか、だれとどんな遊びをしているのかなどのお話ができると思います。日ごろから良い聞き手になっていると、どんどん話してきます。それが言語力を伸ばす良い機会となります。

子どもと話す話題、話し掛け方、話すタイミングなどに注意していくと、言語力を伸ばすきっかけが分かってきます。話し掛け方がうまくなっていくと言語力も育ってきます。

●新しい言葉もたくさん使ってください

学校では、新しい言葉をたくさん学習します。でも、すぐには生活の中で使うことができません。周りにいる大人が意識的に使って、どんな場面や状況でその言葉を使うのか、その意味を理解させながら、使い方を知らせていくことが必要です。生活のいろいろな場面で使うことで、話す回数も増えてきます。自然に使えるようになるまで使い慣らすことが必要です。また、日常的に通じることばのみを使うことで、様々な言い回しを覚える機会が少なくなることがあります。意識して様々な表現を聞かせ、使わせていきましょう。

物の名前を覚えるためにカードを貼ったり、新しい言葉のカードを貼ったりして家族で使っているという例もあります。

●絵日記や日記を続けて書いてください。

聾学校では幼稚部から絵日記に取り組み、小学部、中学部、高等部まで書き続けている例もあります。これは、主に書く力を伸ばすために行っています。絵日記や日記は家庭で書くことになりますので、家庭の協力が必要になります。

日記を書く時には、一日の出来事をただ羅列してつづっていかないように注意してください。一日の生活を振り返って、一番書きたいものを見付けてから書き始めてください。毎日続けていると、何を書くか題材に困ることもあります。でも、何かしら題材はあるものです。生活を見直して、自分の周りを見つめる目を養います。良い題材を見つけた時や、言葉の使い方がうまかったり、新しい言葉を使ったりした時はほめることが大切です。それが毎日続ける意欲にもなります。

また、先生との交換日記が効果的なことがあります。子どもが書いたことに対して質問したり、感じたことを書いてあげたりすると良いでしょう。書き言葉でのやり取りが、言葉の力を高めることにつながる場合があります。

●本を読みましょう

文を正しく読める力が大切です。学校でも、国語の学習を中心に文章を読み書きする力を育てています。本を読んで知識を得たり、新しい言葉を覚えたりするのも役立ちます。

本への興味をもたせるのは家庭の環境が大きいのです。お父さんやお母さんがいつも本を手に行っているような環境が、本への興味をひきます。本を読むようになって、楽しくなり、もっと読みたいと思ってから、自分で手にするようになります。そこまで、学校と家庭で育てていく必要があります。

子どもたちを見守って

●心のケアも大切です。

聾学校では、周りの子どもはみんな補聴器を掛けているので、気づきにくいことなのかもしれませんが、難聴学級在籍児は、自分の障がいに気づき、そのことにコンプレックスを感じてしまうケースがあります。普通学級に行くと「自分だけ補聴器を掛けている。」「自分にだけもう一人先生がついている。」「自分だけ別れて勉強している。」「ぼくはみんなと違うのかな？」というようなことを感じるようです。すると、補聴器を髪で隠したり、みんなの前で「聞こえにくいから…」という話をされるのを嫌がったり、個別指導を嫌がったりすることがあります。

これらに気付く年齢や感じ方はさまざまです。一般的には女の子の方が早く気づき、落ち込み、立ち直りやすいようです。

こうなった場合、周りにいる大人は「あなたは障がい者として…」等と話すことが逆効果になる場合もあります。しかし、特別な配慮を嫌う子どもの場合、配慮を無くしてほかの子どもと同じに扱ってしまうと、当然分からなくなって困る場面が増えてしまいます。それにより、よけいに気持ちを落ち込ませることがありますので、十分配慮する必要があります。

このような気持ちを解消する有効な方法はありません。その解決方法も一人ひとりで違うでしょう。一番大切なことは、身近に本気で親身になって心配してくれる人がいることなのです。いろいろなアドバイスも気持ちや考えを整理するために大切なことです。そばに、こんな人がいるだけで、心のモヤが晴れていくケースもあります。

●将来も見えていきましょう。

聴覚に障がいのある子どもの多くは、乳児期に障がいが発見されて聾学校へ紹介されてきます。そこから教育が始まります。教育相談を受けてから、聾学校の幼稚部、小学部、中学部、高等部へ進むケースがほとんどです。しかし、最近では地元の小学校へ入学したり、地域の高校を受験したりするケースも珍しくありません。「筑波技術大学」という、聴覚障がい者のための大学もあります。ここには全国から受験者が集まり、その数も年々増えているようです。また、地域の大学でも情報保障（手話や文字情報の提供等）の環境が整ってきた大学も増えましたが、希望の情報保障について相談に乗ってくれることが多くなりました。

地元の学校や難聴学級へ通級している子どもたちは、そのまま小学校、中学校、高等学校に進学していくのかもしれませんが、聾学校から地元の小学校に入学したら、聾学校へは戻れないと考える必要もありません。学びの場の変更に関する検討はいつでもできるのです。子どもの将来を考えて、今必要なことを選択していくことが大切です。教育相談として聾学校でも支援していくことができます。お母さんだけが苦労する必要はありません。担当の先生だけが困っている必要もありません。みんなが助け合って子どもを見つめていくことが大切なのです。



当事者のこえ（＊令和5年度の本校児童生徒のこえです。）

- ゆっくり大きな声で話してほしいです。
- 周りが話しているとき、後ろからの声が聞こえないです。肩を叩いてから話してくれるとわかりやすいです。
- 人と話すときに、相手の言っていることが聞き取れなくて、「もう一回お願いします。」と言うのですが、あまり言い過ぎると相手をイラつかせてしまいます。相手をイラつかせたくないの、あまり聞こえなくても聞こえているふりをすることがあります。
- 障がい者の中にもそれぞれ違った悩みがあります。口話が苦手で手話しか使えない人や、手話が苦手で口話じゃないと意思疎通できない人もいます。
- 人工内耳や補聴器を付けていても、放送やアナウンス、テレビの音が聞こえにくく、字幕などが無いとわかりにくいです。
- 耳が聞こえにくいことを理由に心配したり馬鹿にしたりせず、友達のように話し掛けてくれると嬉しいです。
- 補聴器をしていると周りから不思議な目で見られることが多く、自分も周りを気にしてしまう事があります。
- 初めての人と話すとき、声が小さかったり、早口だったりすると、聞きなれないため聞き取れないことが多いです。
- 話をしているときに、聞き取れなくて「もう一度お願いします。」というとき呆れた顔をされたことがあります。(悪口を言われたこともありました。
- 耳の障がいのことを知らない人もいます。(バカにされることもありました。)
- マスクをしていると口が見えなので、口、表情、顔の動きが分からずに聞き取りが難しくなります。
- 補聴器をはさずと全く聞こえない人もいます。(補聴器をはさずして聴こえる人もいます。)
- 聞こえないからといって、大きな声を出せばいいわけではないことがあります。(早口ではなく、声の高さなどに注意して、ゆっくりと、ちょっと大きな声で表情を付けて話してくれるとわかりやすいです。)
- 1番いいのは手話を使って話してくればわかりやすいです。口話と手話を使ってもらえると分かりやすいです。(耳がきこえる人でも手話があれば便利だと思いますよ。)
- たくさんの方が集まっているときやゲームセンターなど、雑音の中で、話されても全く聞き取れません。
- 場所によっては、放送の音が聞きにくいところもあります。
- 耳が聞こえない人は、それぞれ聞き取りやすい音や聞き取りにくい音が違います。
- 発音がおかしくなることもあります。(びっくりされることもありました。)(「さ」なのか「た」なのかあいまいな発音になり、うまく発音できずに伝わらないことがありました。
- 人それぞれ聴こえ方が違います。
- 将来ろうの人でも働きやすい(過ごしやすい)環境を広げて行きたいので協力してほしいです。

●おわりに

難聴といっても、その状況は人によって様々です。対象のお子さんがどのような状況なのか、できること、得意なこと、困っていること、悩んでいることなどしっかり把握することが大切です。その上で、どのような支援ができるか、効果的な手立ては何か話し合う必要があります。また、どのような支援や手立てがあると本人は助かるのか、本人や保護者を交えて話し合えると、より効果的な方法が見つかると思います。そうすることで、対象のお子さんだけでなく、指導や支援する側も安心して対応できます。聾学校では、個に応じた指導や支援を障がいに応じて配慮をしながら子どもたちの可能性を最大限に伸ばせるよう職員間や関係機関と連携を図り、指導や支援にあたっています。難聴をかかえる子どもたちを指導や支援をされる皆様とは、ぜひ、連携を図りながら子どもたちの将来に向けて一緒に考えていけたらと思っています。この資料が皆様の一助となれば幸いです。

用 語 解 説

用 語	意 味
外耳	耳介から外耳道、鼓膜までの間を指します。音を増強して鼓膜まで伝える働きをします。
中耳	鼓膜から耳小骨までの間を指します。鼓膜の振動を蝸牛に伝える役目もしています、ここは鼻の奥と細い管でつながっており、中耳の圧力を調整しています。
内耳	中耳からの音の振動を電気信号に変えて、蝸牛から聴神経、脳へと送る働きをしています。
伝音(性)難聴	外耳や中耳の傷害や機能不全によって引き起こされる障がいのことです。手術や薬物投与などで治る場合もあります。
感音(性)難聴	内耳の傷害や機能不全によって引き起こされる障がいのことです。よく適合された補聴器によって症状が改善されます。
音の強さ(デシベル)	音の強さは、大抵の人が「聞こえない」と感じる音の大きさを0dBとして、大きくなるにつれて大きな数値で表したものです。単位はデシベル(dB)で表します。
音の高さ(ヘルツ)	人間の聞こえる音の高さは約 20Hz から 20,000Hz 位とされています。音の高さは、振動する数で決まりヘルツ(Hz)で表します。
聴力検査	オーディオメータから出る音を聞いて、どのくらい小さな音が聞こえるかを、125Hz～8kHz の周波数毎に測定するものです。
平均聴力	福祉法で使われる平均聴力の算定は、聴力検査の値 $500\text{Hz} + (1\text{kHz} \times 2) + 2\text{kHz} / 4$ から求めます。他にも算定方法があります。
オーディオグラム	横軸に周波数を、縦軸に聴力レベルの目盛りが刻まれ、聴力検査の記録として作成するものです。
A A B R A B R	睡眠下で音の信号が脳まで到達しているかをみる検査(ABR)です。新生児から行うことができるので、スクリーニングにも使われています。

COR	音を聞かせるのと同時におもちゃなどを見せると、音が聞こえると振り向く様になります。この反応の様子から聴力を測定します。
FM補聴器	教師がマイクをつけて、声を FM 電波に乗せてとばします。その電波を補聴器で受ける仕組みで、騒音がある程度あっても教師の声が聞こえやすくなります。
1 歳半健診 3 歳児健診	市町村の保健所で行っている乳幼児の健康診査です。ここで、「言葉が遅い」「呼んでも振り向かない」などの症状によって、難聴が発見される場合があります。
教育相談	本校では難聴のお子さんと保護者や関係する方々へ、乳幼児期から幼稚園、小学校、中学校段階に応じた相談や支援を行っています。
母音	日本語の音を構成している「a、i、u、e、o」の5音を母音といいます。
子音	母音と合わせて音を構成している「k、s、t、n…」などの音を言います。年齢や聴力によって聞こえにくい（聞こえない）音や発音しにくい音があります。
耳栓(イヤモールド)	外耳道に挿入されている耳栓。音の漏れがないようにオーダーメイドで作成します。
口の動き(読話)	聞こえだけでは理解が難しい言葉を、口の動きで判断することです。
空書	伝え方の補助として、空中に指で文字を書くことです。
語彙	日本語の単語を指します。難聴の子どもたちは語彙数が少なくなってしまうです。
言葉の概念	本文の例のように、たくさんの言葉で「象」を表現しています。このように、言葉の意味の広がりを目指すことが多いです。
デジタル補聴器 アナログ補聴器	補聴器はマイクから入った音を増幅して耳に届けています。その間の音の処理をデジタル化したものがデジタル補聴器と呼んでいます。デジタル化によって、音声を際立たせたり「ピー」という音を自動的に押さえたりする機能が付くようになりました。
人工内耳	蝸牛に埋め込んだ電極によって、音を電気信号に変換して伝える補聴器です。電極を埋め込む手術が必要です。
LiD/APD（聞き取り困難症・聴覚情報処理障害）	聴覚情報処理障害 (Auditory Processing Disorder: APD) とは、「聞こえている」のに、「聞き取れない」、「聞き間違いが多い」など、音声をことばとして聞き取るのが困難な症状を指します。通常の聴力検査では異常が発見されないこの症状は、耳から入った音の情報を脳で処理して理解する際に、なんらかの障がいが生じる状態だと考えられています。この状態を表す言葉として、海外では Listening difficulties : LiD という言葉が使用されることが多くなっています。この LiD を「聞き取り困難症」と称し、従来の APD を LiD/APD として表記されています。

福祉制度

【障がい者の等級判定基準】

障 害 の 程 度	手当等級	身障者手帳	障がい種別
両耳の平均聴力が 100dB 以上	一級	2 級	一種
両耳の平均聴力が 90dB 以上	二級	3 級	
1.両耳の平均聴力が 80dB 以上 2.両耳による普通話声の最良の語音明瞭度が 50%以下の者	手 当 の 支 給対象外	4 級	二種
1.両耳の平均聴力が 70%以上 2.一側が 90dB 上で他側 50dB 以上		6 級	
上 記 以 外	福祉法などの処置はありません		

【ＪＲ運賃割引制度】

	割引の対象	種 類	割 引 率	特 記 事 項
1 種	本人が単独で利用する場合	普通乗車券	5 割引	○片道 101Km 以上 利用する場合に限る
	本人と介護者が同伴で利用する場合	普通乗車券、普通急行券 回数乗車券、定期乗車券	本人と介護者共に 5 割引	○介護者は 1 人のみ ○小児定期乗車券の割引はない
2 種	本人	普通乗車券	5 割引	○片道 101Km 以上 利用する場合に限る
	介護者 12 才未満の障がい者と同伴の場合	定期乗車券(鉄道)	5 割引	○介護者は 1 人のみ ○小児定期乗車券の割引はない

【補聴器交付の福祉制度】

- ・身体障がい者手帳をお持ちの方は、補聴器購入する際に購入費用の一部の助成を受けることができます。詳しくは、お住まいの役所・役場の福祉課等にお問い合わせください。また、身体障がい者手帳の交付の対象にならない、経度・中等度難聴者の補聴器購入等の助成を受けることができる自治体が増えてきています。こちらもお住まいの役所・役場の福祉課等にお問い合わせください。

【その他】

バス、国内航空運賃、フェリー、タクシー、有料道路、施設入場料金などの割引などの制度があります。詳しくは利用交通機関・利用施設へお問い合わせください。

参考資料

-
- 母親法—聴覚に障がいがある子どもの早期教育
 金山 千代子 著 ぶどう社 2000年出版

 - 聴覚サポートガイド あなたの耳は大丈夫？
 よりよく聴くための対策から最新機器の紹介まで
 大沼 直紀 著 PHP 研究所 1997年出版

 - 聴覚学習
 コール・E 他編著,今井秀雄編訳 コレール社 1990年出版

 - 補聴器活用ガイド
 大沼 直紀 著 コレール社 1997年出版

 - 学年的水準
 いしぐろ・あきら 著 湘南出版社 1984年出版

 - 難聴 言語障がい児童・生徒の学校教育
 村上 宗一 著 協同医書出版社 1996年出版

 - 聴覚障がい児のことばの指導
 松沢豪・中野善達 著 福村出版 1982年出版

 - 聴覚障がい者の心理臨床
 村瀬 嘉代子 編集 日本評論社 1999年出版

 - 聴覚障がい児の言語指導—実践のための基礎知識
 我妻 敏博 著 田研出版 2003年出版

 - 星の音が聴こえますか
 松森 果林 著 筑摩書店 2003年出版

 - 三省堂こどもことば絵じてん
 三省堂編修所 編集 金田一 春彦 三省堂 1996年出版

 - 三省堂ことばつかいかた絵じてん
 三省堂編修所 編集 金田一 春彦 三省堂 1998年出版

 - デジタル補聴援助システム 公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会
 (<https://www.choukaku.com/lending.html>)

 - 人工内耳について 日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会
 (https://www.jibika.or.jp/modules/hearingloss/index.php?content_id=3)

 - 一側性難聴について 日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会
 (<https://www.jibika.or.jp/owned/hwel/news/005>)

 - LiD/APD（聞き取り困難症・聴覚情報処理障害）
 聞き取り困難症・聴覚情報処理障害（LiD/APD）
 当事者ニーズに基づいた聴覚情報処理障害の診断と支援の手引きの開発
 聴覚情報処理障害の症状を示す小児の学習支援のための検査法および補聴技術の開発
 (<https://apd.amed365.jp/about-apd/index.shtml>)
-

あとがき

以前に旭川聾学校での教育相談としていろいろな所へお伺いする機会があり、そこでお話しさせていただいたことやご質問を受けたことが沢山ありました。小学校等へお伺いしていろいろな話をさせていただいても、時間が限られていたり、話し忘れたりすることもありましたのでいくつかの資料を作りました。最初は2～3枚だったのが、あれもこれとも思いつくままに書いていくと何ページにもなってしまいました。そこで、これまでの資料をまとめ、拙書を作ることになりました。

ここに書かれていることは、聾学校の中で伝わってきた指導法であったり、配慮事項が書かれていますが、難聴学級などでも同じ配慮が必要なのです。難聴学級の先生方や初めて難聴の子どもに接する方にもわかりやすく読みやすいように書いたつもりですが、内容はまだまだ改訂を重ねていかなければならないと思います。本書をお読みにになりましたら、どうぞご教示くださいますようお願い致します。

今回は、函館聾学校の教育相談の資料として、本書が、難聴のお子さんやその周りにいる方々のお役に立てば幸いに思います。また、函館聾学校の教育相談を通じて子どもたちの学校生活がより楽しくなることを願っております。
(平成30年11月、文責：元校長海田)

平成30年に再発行されてから5年が経過しました。丁寧に細かな配慮をまとめたこの資料は、貴重な本校の財産になっています。まとめられた海田元校長先生に敬意を表したいと思います。また一方で、コロナ禍が過ぎ去り、一人一台端末などの導入でICTを活用した授業が進展し、教育を支える環境が大きく変わった時期が重なった5年間になりました。そこで、改めて読み返し、様々な点検をすることといたしました。点検してみますと、新しい補聴器の機種や人工内耳の体外部（サウンドプロセッサ等）も新しく更新されました。また、本校にはロジャー（FMマイク）を導入し使用できるようになりました。更に、音声認識アプリの進化で、音声を文字にして可視化し、確認できる場面が増えました。これらの事は大きな変化です。しかし、多くの場面、聴覚障がい児（者）への配慮事項は、変わっていない部分が多いと振り返る機会となりました。

また、聴覚障がい教育においては、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所において平成24年3月に「軽度・中等度難聴児の指導・支援のために～軽度・中等度難聴児をはじめ担当される先生へ～」がまとめられ、平成28年3月には「聴覚障害教育Q&A50～聴覚に障害のある子どもの指導・支援～」がまとめられています。また、文部科学省では令和2年3月に「聴覚障害教育の手引」が発行されており、いずれも教員のための資料ですが全国で活用されています。合わせて活用していただき、よりよい教育環境を作り、聴覚障がい児の可能性がより広く大きく拓いていくことを期待し、再発行いたします。
(令和6年3月、文責：現校長門眞)

難聴をもっと知るために

～難聴の子どもにかかわる先生方へ～

平成17年6月1日初版発行

平成30年11月再発行

令和6年3月再発行

発行 北海道函館聾学校

〒042-0941 函館市深堀町27-8

電話(0138)52-1658

FAX(0138)52-1659

e-mail hakoro@hokkaido-c.ed.jp

http://www.hakoro.hokkaido-c.ed.jp

スピーチバナナ作 須藤 彩子（北海道函館聾学校教諭）

挿絵 河西 信也（元北海道旭川聾学校教諭）